

# コーパス言語学の視点で考える 「教育・ことば・ジェンダー」

石川慎一郎

## 1. 言語使用における性差研究とコーパス

言語教育、とくに外国語教育において、学習者に自然な産出を行わせようとすれば、言語における性差の存在について触れざるを得ない。ただ、ことばの性差というものは、往々にしてとらえにくい。このため、男性や女性の言語使用の一般的特質を記述する実証研究が古くから行われてきたわけであるが、その中には、ごく少数の話者の産出データを基にした主観的解釈も少なくない。

しかし、小規模なデータから得られた知見の一般化には危険も伴う。「人が言語を使用するのと同じく、人は言語に使用されている」として、言語と性と権力の相関の構造を指摘した Lakoff (1973/1975) の記念碑的著作も、使用したデータの信頼性は制約的である。女性は付加疑問文を多用して決定をはぐらかすのだという Lakoff の主張に関して、Dubois & Crouch (1975) は、男女による会話の録音を分析し、ある種の状況においてはむしろ男性のほうが付加疑問を多用することを明らかにしている。このように、報告される知見が論文によって異なるということは、言語の性差の研究においては珍しいことではない。たとえば、男女のいずれがより多く話すのか、といった最も基本的な問いに対しても、先行研究の見解は一致していない (Ishikawa, 2023: 148-150)。Dubois & Crouch も言うように、たまたま耳にした特異なエピソードを「非体系的で非統制的、かつ、検証不能なやりかたで観察・洞察」するような研究手法は、「事実の誤認・事例の捏造・変数の混同・推論の誤り・他者の研究の軽視」といった問題を引き起こす。

こうした背景を考慮した場合、コーパスは、言語の性差研究の精緻化に一定の貢献をなす余地があると言えよう。多数の話者による産出を大量に集めたコーパスは、特定の個人ではなく、抽象的な言語集団の産出の表象とみなすことができる。ゆえに、何らかの言語項目の頻度に関して、仮に男女の産出データ間に有意な差があれば、言語使用における男女差の存在を主張しやすい。

## 2. コーパスを用いた性差研究の課題

もっとも、コーパスを用いた性差研究にも多くの制約がある。ここでは4点に絞って述べたい。

1点目は、性差を厳密に検証するには、それ以外の条件の統制が不可欠ということである。しかし、年齢・社会階層・教育段階・地域といった話者関連の変数、内容や長さといった産出関連の変数、また、場面や対人関係といった環境関連の変数をすべて統制することはほとんど不可能である。

2点目は、性差と個人差の慎重な検討の必要性である。男女差があると言う場合、男女各々の群内差を超える群間差が存在することの挙証が必要だが、適切なデータを用い、厳密な統計的手続きを取っている研究は少ない。

3点目は、心理学で言うフレーミングの問題である。(最も原型的な)コーパス研究では、既存の学説や知見を前提視せず、テキストを白紙の目で観察することの重要性が強調されるが、「どのような男女差があるか」という研究設問を立てること自体が研究を規定し、結果的に、コーパスを見ているのではなく、コーパスを都合よく使って、自分が見たいものを見ているだけ、ということにもなりかねない。

4点目は、最も重要な論点であるが、一般的なコーパスでは、生物学的な男女の比較はできても、社会的な性の議論はできないということである。男女の二項区分にあてはまらない性や、多様な性的志向や性自認、また、状況や環境で不断に変化する流動的な性のありようをふまえたコーパス研究の手法は、筆者の知る限り、いまだ確立していない。

### 3. 今後の展望

コーパス研究には、頻度データや統計を根拠として、知見を客観的に示せるという大きな強みがある。しかし、その強さは諸刃の刃でもありうる。実際、コーパスが性差研究に無批判に応用された場合、男女の二項対立的区分や両者の差異が「客観的事実」として固定化されてしまう危険性もある。コーパスから得られた知見が言語教育や外国語教育の基礎データになる場合も少なくないことを考えれば、これは大きな問題となりうる。

では、どうすればよいのであろうか。研究手法の面で考えられるのは、最近の応用言語学で影響力を増しつつある dynamic systems theory (DST) のコーパス研究への応用である。研究対象としての性差を固定的にとらえず、多くの社会的要因が混ざり合う複雑系システムの中で時間的に変化しうる存在とみなす DST の発想から学べる点は多いであろう (Hiver, Al-Hoorie, & Evans, 2021)。教育応用の面で考えられるのは、言語学者と教育学者(実践者を含む)とジェンダー学者の協働の促進である。コーパス言語学では、高頻度なものこそが重要であるとする暗黙の了解があるわけだが、この前提を教育の現場にそのまま持ち込むことはもとより乱暴に過ぎよう。学際的な協働によって言語研究と言語教育をうまくつないでいく工夫が求められる所以である。

#### [引用文献]

- DUBOIS, Betty Lou, & CROUCH, Isabel. (1975). The question of tag questions in women's speech: They don't really use more of them, do they? *Language in Society*, 4 (3), 289-294.
- HIVER, Phil, AL-HOORIE, Ali H., & EVANS, Reid. (2021). Complex dynamic systems theory in language learning: A scoping review of 25 years of research. *Studies in Second Language Acquisition*, 44 (4), 913-941. doi:10.1017/S0272263121000553
- ISHIKAWA, Shin'ichiro (2023). *The ICNALE guide: An introduction to a learner corpus study on Asian learners' L2 English*. Routledge.
- LAKOFF, Robin. (1973/1975). Language and women's place. *Language in Society*, 2, 45-81. [Reprinted in *Language and woman's place*. Harper & Row, 1975.]

(いしかわ しんいちろう・神戸大学教授)